

妊婦の冷え症はお産を長引かせる

お産は女性にとって貴重なライフイベントで、母児の安全のために異常分娩を防ぐことが重要です。主な異常分娩としては、微弱陣痛や遷延分娩があります。微弱陣痛とは、陣痛が弱くお産が進行しない状態であり、遷延分娩は、一定回数の陣痛または規則的な陣痛が始まってから、時間を経過しても児が産まれないものをいいます。過去の研究では、異常分娩と冷え症の関係について、冷え症の場合、早産の発生率は冷え症ではない場合に比べ約 3.4 倍あり、冷え症は早産の要因だと考えられました。多くの妊婦が冷え症の自覚があるにもかかわらず、周産期医療では、異常分娩への影響についての問題意識が乏しい現状があります。そのため、微弱陣痛と遷延分娩について、冷え症が影響しているのかを調べることで、微弱陣痛や遷延分娩の回避につながると考えました。以上から、この研究では、冷え症の妊婦と、そうでない妊婦では、微弱陣痛と遷延分娩の発生率が違うのかを調べることにしました。

研究の調査期間は 2009 年からの 1 年間で、研究対象は、分娩後の帝王切開を除く女性 2540 名でした。調べる方法は、アンケート調査と医療記録からのデータ抽出で、微弱陣痛や遷延分娩に関係する、冷え症以外の要因の影響が出ないように調整しておこないました。なお、この研究は倫理審査の承認を経て実施しました。

研究の結果、微弱陣痛についての割合は全体の 11.3%であり、そのうち 65.3%が冷え症でした。また、冷え症の妊婦の微弱陣痛発生率の割合は、そうでない妊婦に比べ、約 2 倍でした。遷延分娩の割合は全体の 6.3%で、そのうちの 67.7%が冷え症でした。冷え症の妊婦の遷延分娩発生率の割合は約 2.4 倍で、冷え症と微弱陣痛ならびに遷延分娩は、関係があることが推定されました。

この研究の結果から、冷え症が異常分娩の要因の 1 つであることがわかりました。まずは、社会全般や臨床の現場で『妊婦の冷え症はお産を長引かせる』という研究結果を広め、冷え症のスクリーニングの実施が必須だと考えます。冷え症の第 1 の発見は、冷え症の自覚症状で、簡単に実施できるため、妊婦健診等での実施を促したいと考えます。